

科学忍者隊ガッチャマン・二次創作

over-spec

裕川 涼

● PHASE 1 - ISO本部・長官室

国際科学技術開発機構の長官室で、アンダーソン長官は、南部考三郎博士と向かい合っていた。

「マントル計画の進捗状況は予定通りです」

「……ふむ」

アンダーソンは、南部が持ってきた分厚いファイルに目を走らせた。

国際科学技術開発機構 (International Science Organization) は、地球上の数知れない公害から、世界の人類と自然と救うため、宇宙・地底・海底の科学技術を統合し、無公害エネルギー源の開発と、地球自体の改革を目的として誕生した機関である。各国の科学者や有識者達が結集し、地殻エネルギーを利用するためのマント

ル・プランを推進していた。ところが、ギャラクターという陰謀団が、この計画を奪取し独占するための活動を開始した。ギャラクターは、世界各地で科学者や政府の要人を誘拐したり、殺害したり、あるいは科学施設に対する破壊工作を行ったりした。ギャラクターの陰謀を察知した南部は、身寄りのない少年達を引き取って訓練し、特殊装備を与えて、科学忍者隊を組織した。南部の指揮のもと、科学忍者隊はギャラクターを迎え撃ち、確実に戦果を上げていた。

「度重なる妨害工作は相変わらずですが、忍者隊の諸君がよくやってくれています」

眼鏡の奥で南部の瞳が輝いた。そのまま窓の外を見る。

殆ど普段と変わらない姿であったが、わずかにはれぼったい目をしていることをアンダーソンは見逃さなかった。

「疲れているのかね？ それとも、昨日の酒でも残っているのかね」

「いや、そういうわけでは……」

昨日、ISOでは、スポンサーでもある各国政府首脳を呼んでの会議と懇親会が開催された。首脳陣はそこ

その時間に解散したが、随行してきた実働部隊である事務官達との打ち合わせは明け方ちかくまでかかった。飲みながらの会議であったが、駆け引きの場でもある酒が入ったくらいで後れを取る南部ではなかった。その後、マントルプランの進捗状況をまとめて、朝一番にアンダーソンの所に来たのだから、南部には昨夜ろくに眠る時間など無かったことは確かである。

アンダーソンは、机の上のインターホンを押して秘書を呼び出し、二人分のコーヒーを持つてくるように命じた。

十五分ほどしてやってきた、スーツに身を包んだ秘書は、コーヒーカップをアンダーソンの机の上に置いた。

「食堂のコーヒーメーカーが不調で、インスタントしか無いのですけれど……」

「この間もそう言つてなかったかね」

「申し訳ありません、長官。修理には出したのですが、職員の数が多いので使用頻度も高く、すぐに不調になってしまふのです。おまけに、食器洗い機まで調子が悪くて、お待たせしてしまいました」

秘書が出て行った後、南部はコーヒーを口に含んで、微妙な表情をした。

「インスタントは口に合わんかね？」

「……」

長官の前で、コーヒーの味に対する苦情などという、優先度の低い会話を南部が始めるはずがない。アンダーソンは、あきらめて、ファイルを読みながらコーヒーを口に運んだ。南部の方は、一気にコーヒーを飲みきつてカップを置いた。

「ところで、実験室と工作室を使いたいのですが」

ISOを代表する天才総合科学者の申し出を断る理由などなかった。

「では失礼します」

● PHASE 2 ギャラクター基地

「ベルクカツツエ様、ISOに潜入した工作人員から秘密通信が入っています」

「何事だ？」

地底深くに作られたギャラクター基地の指揮官室で、紫のマスクを身に付けたベルクカツツエが、マントを翻して巨大なメインモニターに向かった。モニターにノ

イズが走り、白衣の平凡な男の顔が出た。

「南部博士が、午前中から熱心に設計図を書いていました。計算機シミュレーションも同時進行させていた様子です。今は、実験室と工作室を行ったり来たりして、何か作っています」

「何だと？ 南部め、また何か秘密兵器でも開発しているのやもしれぬな」

「どうしますか？」

「南部が何を作っているのか探り出せ」

ベルクカッツェは命じた。

「はい、しかし……」

「どうした？」

「今回、南部博士は一人で作業しているので、誰かから情報を盗み出すことができないのですが」

「うーむ。仕方がない。では、南部が装置をどこに持っているかを突き止めよ。警備の隙をついて部隊を突入させ、奪って確かめるのだ」

「ははっ」

通信が切れた後、ベルクカッツェは呟いた。

「南部が何を作ろうとも、ギャラクターの科学力と勝負になるはずが無い。しかし、どこかにあるはずの秘密

基地にも戻らず、人目のあるISOで開発を始めるとは……不可解だな」

● PHASE 3 三日月珊瑚礁

「お帰りなさい、博士」

夜遅くになって、尾行の無いことをしつこく確認しながら三日月珊瑚礁基地に戻ってきた南部を、忍者隊GI号を務める健が出迎えた。

「随分遅かったですね。何か問題でも？」

「いや、特に何も無い。遅くなって済まなかった。これから少しデスクワークをしなきゃならんから、私は部屋に戻る」

「まだ、首脳会議の後始末が終わらないんですか」

「そういうわけではないが……」

「あまり無理をなさらないでください。いつまたギャラクターが襲って来るかわからないんですから」

南部は目を見開いた。

「健、それは私の台詞だ。いつ襲撃があるかわからんだ。私の帰りなど待たず、休める時に休んでおきたまえ。忍者隊としてのつとめなのだから」

片手を上げて自室に向かう南部の後ろ姿を、健は見送っていた。

緊急警報が鳴り響いたのは、それから小一時間たった時だった。待機していた忍者隊メンバーは、コントロールルームに駆け込んだ。一瞬遅れて南部がファイルを手手に現れた。

「ISO本部がギャラクターに襲撃されている！」

通信の主はアンダーソン長官だった。

「状況を教えていただきたい」

南部の冷静な声が響いた。

「侵入したのは数十人程度の部隊だときいている。見張りの警備員を倒した後は、他の実験室には目もくれずに、全員が第三実験室に向かったと」

第三実験室は、クレーンが備え付けてあり、大きめの実験機材や製作途中の装置などを置く場所として使われていた。南部が昼間に作業をしていたのもそこである。

「では、メインコンピュータや、マントルプランのデータなどは……」

「無事だ。侵入の際にISOビルの一部が破壊されたが、他には被害は出ておらん。第三実験室には他に誰もいなかったから、今のところ人的被害は広がってはおりん」

「第三実験室は、昼間私が使った後、立入禁止にしていたのです。明日作業の続きをするつもりでしたので」

「そうか、不幸中の幸いだ」

「いずれにしてもギャラクターの好きにさせるわけにはいかない。科学忍者隊を出動させます」

「頼んだぞ、南部君」

アンダーソンの姿がモニターから消えたのを見届けて、南部は振り返った。

「ギャザー、ゴッドフェニックス発進せよ。ISO本部に乗り込んで、ギャラクターを一掃してくれたまえ」

「ラジャー！」

五人が一斉に敬礼する。

次々にバードスタイルになって部屋を駆け出すのに混じって、南部も走った。

「今回は私も一緒に行こう。理由がさっぱりわからんが、ギャラクターの目的は、私の開発した装置らしい。長官もいらつしやることだし、ISOが気がかりだ」

● PHASE 4 ISO本部ビル・第三実験室

抵抗らしい抵抗もされないまま、ベルクカッツェに率いられたギャラクターの兵士達はISO本部の第三実験室になだれ込んだ。

実験室には、トレーラーハウス程度の大きさの、太い管でつながった複雑な装置が置かれていた。金属製の蛇腹で覆われたパイプが何本も、部品と部品を繋いでいた。

「カッツェ様、これは一体……」

「動かしてみないとわからんな。よし、メインパワーをオンにして調べるのだ」

ベルクカッツェは、コンソールらしきスイッチが並んでいるパネルに近付いた。透明なカバーを上げ、一番大きな赤いスイッチを押し込んだ。コンソールのLEDが点滅し、装置が低い唸りを発し始めた。

「では、私が……」

装置の端の箱についている扉を開けて、中に首を突っ込んだ二人組の兵士は、箱の中から出てきたロボットアームに首を掴まれ、中に引きずり込まれた。自動でドアが閉まり、ロックがかかる音がした。

「カッツェ様、息ができません……」

兵士が中で暴れたが、すぐに静かになった。どうやら、窒息したらしい。

「ええい、早く助け出すのだ！」

慌てたカッツェが、パネルのスイッチをあこれこれと押し始めた。別の兵士が、ドアの閉まった箱の隣につながっている筒状の部分に向かってマシンガンを撃った。

「こつちを壊してやる！」

「おお、そちらを開ければ、中で何があつたかわかるかもしれない」

カッツェが感心したその時、機関銃の連射に耐えかねて、装置の外側に取り付けられていた細い配管が破断した。バシユつという音とともにガスが吹き出してくる。ガスの進路にいた兵士が三人まとめて燃え上がった。装置を取り巻いていた兵士達から、声にならない声があがった。

可燃性のガスか、と、慌ててカッツェは鼻と口を覆った。しかし何の刺激臭もしてこない。

吹き出したのは、有毒ガスでも何でもない、ただの過熱水蒸気だった。但しその温度は高く、繊維類の自然発火点をはるかに超えていた。

「何ということだ！ こんな危険なものを放つては置け
ん。壊せ、壊せーっ！」

カツエの命令に、兵士達は一齐にマシンガンのトリ
ガーを引いた。だが、装置は、弾丸を全てはじき飛ばし
た。金属光沢を放つ表面には、傷もついていない。兵士
達の動きに反応して、装置に組み込まれたセンサーが
光った。金属製のパイプの片方が抜けて持ち上がった。
装置から抜けた部分はノズルになっていた。そのノズ
ルの先から液体がほとばしった。直撃を受けた兵士は、
液体に胸を貫かれて、悲鳴を上げてその場に倒れた。

「何だこれは！」

ノズルの先から噴射されたのはただの水であった。
しかし、水でも高圧をかけて音速を超える速度で吹き出
させれば、生物の組織はもちろんのこと、金属板でも切
断できる。兵士達が慌ててノズルを銃撃したので、危険
極まりない水を吹き出しながらノズルが暴れ回り、水の
進路に居た兵士達が切り裂かれて次々に倒れた。

「ええい、何をしておる！ 回り込んで攻撃せんか！」
生き残った数人が、装置の反対側に回り込んだ。それ
をセンサーが検知して、今度は別の二本のパイプがその
ノズルを兵士達に向けた。マシンガンの引き金を引く

よりも先に、ノズルの先から飛んだ液体が兵士に命中し
た。ある者は煙を上げて重傷の火傷を負い、ある者はそ
の場でどろどろに溶けた。

「何としたことだ……全滅だと……？」

カツエは、呆然と、その場に座り込んだ。装置を奪
いに来た時に何の抵抗もなかったのは、装置の防御性能
によほどの自信があったからに違いない。

カツエの耳に、倉庫入り口付近に駆けつけて来る足
音が聞こえた。カツエは窓際まで飛び、いつでも脱出
できる態勢のまま、入り口の扉を凝視した。

● PHASE 5 I SO 本部

ゴッドフェニックスを I SO 本部玄関前に強行着陸
させて、バードスタイルの健が飛び出した。ジョー、
ジュン、甚平が続く。遅れて飛び出した竜は尻餅をつい
て着地し、その後を、ファイル片手に南部が飛び降りた。
「急げ、I SO を守るんだ！」

健が走った。残る四人も続いた。

「しかし、実験室を一つだけだけ狙うなんて、ギャラク
ターの奴ら、何を考えているんだ？」

ジョーは訝った。

「わからん、とにかく叩き潰さないと」

「その角を右だ！」

後から追いかけてきた南部が叫んだ。忍者隊は指示通りに廊下を走った。反対側の廊下の端のエレベーターが開いて、アンダーソン長官が姿を現した。

「南部君！」

「長官、ご無事でしたか。今、忍者隊が実験室に向かっています。長官はどうか安全な所で……」

「南部博士、来て下さい。ギャラクターの奴ら、全滅してます」

健の叫び声が廊下に響いた。アンダーソンと南部は顔を見合わせ、早足で第三実験室に向かった。

● PHASE 6 I—SO本部ビル・第三実験室

駆けつけた科学忍者隊が目にしたのは、実験室で倒れている数十人のギャラクター兵士だった。床は血と水で濡れ、化学反応で発生したらしい刺激臭が漂っていた。壊された配管からは、シューシューと音を立てて気体が流れ出していた。

「一体なぜこんなことに」

健が、倒れている兵士に駆け寄った。その動きを検知して、モーシオンセンサーの赤い光が点滅した。ウォータージェットのノズルが鎌首をもたげた。

「健、危ない！」

異常を察知したジョーが、健を突き飛ばした。健の居た場所を、一直線に水の刃が貫いた。ジョーはエアガンを引き抜いてノズルを撃った。上に跳ね上げられたノズルから吹き出した水が、実験室の天井に穴を空けた。

「やめたまえ！」

南部が入ってきた。優雅に歩きながら装置のセンサーを巧みに避けてコンソールに近付いた。手早くキーを叩くと、水を拭きだしていたノズルの先端は全て装置の穴に収まった。

「科学忍者隊の諸君！ 今回は南部の新兵器にしてやられたが、次は必ずそいつを奪ってやるぞ」

窓の方から、カッツエの甲高い声が響いた。

「ベルクカツエ、貴様……」

健がブーメランを投げた。カッツエは飛んで躲した。突然、南部が笑い出した。

「南部、何がおかしい！」

カツツエが怒鳴ったが、南部の笑いはおさまらない。ひとしきり笑って、眼鏡を外し、笑いすぎて出た涙をハンカチで拭ってから、南部はようやく息を整えた。

「ベルクカツツエ、君は一体この装置を何だと思ってるのかね？」

「……」

「まあいい」

南部は、コンソールを操作し、最初にギヤラクター兵士が閉じ込められた箱の扉のロックを解除した。ガチャリ、と音がして扉が開く。

「竜、運び出してくれ」

竜が、中で倒れていたギヤラクター兵士を担ぎ出した。南部は、中を目視で確認してから扉を閉めた。

「ジュン、部屋の換気扇を作動させたまえ。どうも空気が悪い」

ジュンが、壁際のエアコンのスイッチを入れた。籠もっていた血の臭いや有機物の焦げた臭いが抜けて行った。

「まったく、こんな滅茶苦茶な設定で動かすからだ。折角だから、この装置の正しい使い方を、今、見せてやろう」

南部は、流れるような指捌きでコンソールを叩いた。三分とたたないうちに、ポロピロポロン、と電子音が響いた。南部は、装置の箱についている扉を開け、中に入っていたトレーを引き出した。十個ほど並んだ小さなコーヒークップから、淹れたてのコーヒートの香ばしい香りが漂った。

「ジョー、君はイタリアの出身だったな。味見してみたまえ」

ジョーは、南部からカップを受け取り、コーヒートを口に含んでみた。一流レストランで出されるエスプレッソの味がそこにあつた。

「アメリカンもブレンドコーヒーもこれ一台でできるぞ。長官、どうぞ」

アングダーソン長官は、南部からカップを受け取った。一口飲んで、味も香りも申し分ないことがわかった。

「君たちの分もある……おっと、甚平にはまだ早いかもしれないな」

「そんなことないやい！」

甚平がカップをひったくるようにして取り、一口で飲み込んだ。

「……に、苦い」

顔をしかめながら、やつと言葉を発した。

「やつぱり甚平にはちよつと早かつたみたいね」

「ちえつ、お姉ちゃんまで俺を子供扱いして……」

「では、説明しよう」

南部が厳かな声を発した。

「まず、この端の箱は、コーヒー豆を保存するために作った。重い豆を人手で運び上げなくても良いように、袋を近づければ自動でアームが引き上げてくれる。その後、豆を酸化させずに保存するために、内部の空気を二酸化炭素に入れ換えるのだ。ギャラクターの諸君には気の毒だったようだがね」

南部の靴音が実験室に響いた。

「次にこの部分だが、過熱水蒸気を用いて豆をローストするので。圧力が上がりすぎないように、安全弁に配管を繋いでおいたのだが……」

南部は、断ち切られた金属管を見つめた。

「壊してくれたな。交換が必要だ」

南部の鋭い目に睨まれて、カツツエは思わず窓際ですくんだ。

「次のノズルだが、この箱に取り付けられている時は、箱の内部に向かって高速で水を吹き出す。水の温度は、

自由に設定できる。カップでも皿でも、箱の中に入れておけば、大抵の汚れはこれで落とせる。中に入らないものを洗う時は、ノズルを外に出して使えば良いのだ。モーシオンセンサーがあるから、狙いを外すこともない。どうだ、便利だろう？」

「じゃあ、最後の毒薬は……」

カツツエの声はうわずっていた。

「これかね？」

南部は、体を溶かされて倒れたギャラクター兵士の方を狙ったままで止まっているノズルを指さした。

「水だけで汚れを落とせなかった場合のために、強酸と強塩基の溶液を吹き出すのだ。油やタンパク質は完全に溶けるし、固まった無機物だって溶かすことができる。廃液を処理する時は混ぜて中和すれば、安全に処理できる」

南部は言葉を切って、息を整えた。

「博士、じゃあこの装置は……」

「これはただのコーヒーメーカーと自動食器洗い機だよ、健。ISOのコーヒーメーカーと皿洗い機が不調で、修理してもすぐ壊れると聞いたので、ちよつとやそつとじゃ壊れないように作ってみたのだ。出力には、

十分に余裕を持たせてある」

余裕つてレベルではないだろう、とその場にいた全員が心の中で突っ込んだ。

「しかし、さすがにこのままだと危険なので、明日、リミッターを設定して十分にフェイルセーフにしてから、ISOの食堂部に渡すつもりだったのだ。作業が全部終わるまでの間、この部屋を立入禁止にしておいたのだが、わざわざ侵入する物好きが居るとはね」

「な、何だと……」

「カッツェよ、残念だがこれは、君が想像しているような新兵器ではない。私が、こんな誰でも入れるような部屋で、新兵器の開発などするわけがないだろう」

「南部め、覚えていろ」

カッツェは、窓を破つて外に飛び出した。忍者隊が窓際に駆け寄った時には、既にカッツェの姿はどこにもなかった。

「諸君、今から追つても無駄だ。次の戦いに備えたまえ。全員撤収するぞ」

「ラジャー」

健が答えた。忍者隊は、部屋の扉に向かって歩き出した。装置の脇に立っている南部に向かって、ジョーは話

しかけた。

「博士、ギャラクターの奴らは、南部博士の作った台所用品に全滅させられたつてことですか」

「不本意だがそうなるな。私が開発した中では、近年希にみる平和的な装置だった筈なのだが」

科学忍者隊と一緒に、南部もアンダーソンも第三実験室を出た。

「部屋の後片付けは今夜のうちに済ませるように、警備員に命じておこう。明日は朝から予定通りに作業ができるようにしておくよ」

「ありがとうございます、長官。それからこれを……」

やつてきた時から手にしていたファイルを、南部はアンダーソンに差し出した。

「あの装置の操作マニュアルです。少なくとも、明日の午後からは、淹れたてのコーヒーを飲めるはずですよ」

あとがき（ネタバレ注意）

Reeさんとの話がきつかけで、ガッチャマンを見ていたら、フィクを思いついたのでついつい勢いで書いてしまいました。

南部博士のキャラの立ちっぷりに感激したので、やっぱり南部博士本になつてしまいました。

一言で言うなら、「南部博士がISOでコーヒーを淹れるための準備をする話」ですが、天才科学者の発明品にギャラクターの陰謀が絡むと、たかがコーヒーがおおごとになるわけで……。

笑っていただければ嬉しく思います。

Reeさんの意見で、「ギャザー、ゴッドフェニックス発進せよ」が欲しいと言われたのでちよつと手直ししました。

二〇〇九年 一〇月 三一日 ver.1

二〇〇九年 十一月 一日 ver.2

裕川 涼